
主人公はスライムクイーンッ！

ビビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公はスライムクイーンッ！

【Nコード】

N8343Z

【作者名】

ビビ

【あらすじ】

エビルデインは最強のスライムを造るという名目で半ば遊び目的で魔王に錬成された。戦闘能力を増すために迷宮探索をさせられるが、建築の分野に興味を見出したエビルデインは日々迷宮の道路を舗装する作業に没頭する。夢は迷宮に一戸建てを造り、其処を拠点に迷宮を隅々まで改造する事！しかして、それは上手く行くことはなく、侍 不破恭一に出会ってからは彼の運命に取り込まれ、振り回され続けることになる。

a r c a d i a と二重投稿しております。

壱・不意打ち侍

太古より存在する【アステカ遺跡】は過去の王を祀るために造られたものである。

本来なら霊験あらたかな聖地として畏敬を持って保護されるべき文化遺産なのだが、事情が変われば扱いが変わるというものだ。

遺跡として観光地の役割を持っていた此処は、多くの人々に親しまれていた。

考古学に興味のあるもの、単純に文化的なものを見知りしたかったもの、恋人を誘うための口実。実に様々な用途があつたのだが、現在に至っては民間人は一切の立ち入りを禁止されている。

それは何故か。

彼の場所は突拍子も無く変質し、迷宮遺跡に成り果てたのだ。

そして迷宮となつた場所は必然的に争いを生む。

煉獄の如く燃え盛る第五階層のように。

「燃やせ！ 紅蓮の業火で有象無象を消し炭にするのです！」

鞆革のジャケットを羽織つた少女は小さな身体を精一杯反り上げて、空飛ぶ巨体の上で吼えている。

眼下には武装した白肌の天人たちが純白の翼をはためかせている。だが生い茂る雑草が燃え、それによって生み出される熱波で飛翔するのを邪魔されているようだ。

憎憎しげに眉間を引き攣らせるが、大空の覇者と呼ばれるそれの前にして彼らは地を離れられない。

それは竜と呼ばれる生命だった。

大きな身体を覆うのは世界で最も頑健で最も柔軟と呼ばれる竜の漆黒の鱗。

鋭い爪は岩をも切り裂き、硬い牙は鋼をも噛み砕く。

縦に裂けた黄金の瞳は冷たく世界を睥睨し、まさに王の威風を身に纏っている。

この竜は人の身の三倍ほどの大きさがあり、それが空を飛ぶ姿は圧巻としか言い様がない。

更には大きく開いた口からは炎が揺らめき、今にも火勢を放ちそうだ。

空を馳せる暴君　凶悪な姿に天人は怯えるように武器を硬く握り締めていた。

「どうするの？」

しかし、大きな身体とは対照的に、この竜はいつそ穏やかな口調で少女の意見を求めている。

少女はだんと竜の背中を強く踏み締めると、再び炎を放つように指示をした。

迫り来る焰に恐れを為したのか、天人たちは反転し、蜘蛛の子を散らしたように逃げ出していく。

【アステカ遺跡】は迷宮の中でも珍しく緑豊かな自然を誇っている。それらは竜の吐息で燃え果て、今も炎の撒き餌として轟々と朽ちていくばかりだ。

ふん、と鼻息を鳴らすと少女は空を飛ぶ竜から飛び降り、燃える大地へと降り立った。

熱波を受けてもその身は揺らぐことすらなく、ゆるりと挙げた腕を無造作に下ろす。

腕が変質し氷塊となり、飛沫を飛ばして炎を侵す。
数秒も待たず、炎は消え失せ、氷結した。

少女は蒼色の瞳を細め、熱波で乱された腰ほどまで伸びた銀髪を振り払う。さらりとした銀糸が宙を舞い、光を反射して煌いた。

竜も後に続いて地面へ降り、ぶつぶつと小さく呟く。すると竜の巨体に方陣が纏わり付き、繭のようになった。

少女は竜の変態に興味を示すことなくぼんやりと凍てついた木々を観察していると、その間に編まれた方陣が消え去る。

「大きい身体は本当不便だよねえ」

繭から出てきたのは小さくなった竜だった。

凶悪さのなくなった幼竜はぱたと可愛らしい音を立てて空を飛ぶと、少女の小さな頭に飛び乗った。

むぎゅ、と少女は肩を竦める。ちよつと重いらしい。

「ここを占領すれば『アカシックレコード』のモグラ達など一蹴できますよね。全く！ 何が『迷宮を見つけたのが我々が先だから倭は手を出すな』ですか？ 図々しいにも程がありますよ。彫りの深い不健康な青白い肌をした人民の癖に生意気な！ 折角私が補修したのに道路が台無しじゃないですか。ぶつ殺しますよ！？」

「エビイ……それはどうかと思うよ。一族の命運を背負う存在が塵芥にも劣る愚妹どもに感情を剥き出しにすることは褒められたものではないね。寛大な御心を持って首を刈り取るだけに留めておこよう」

「ふふーふ！ まさしく！ かといって殺すのは言い過ぎでしたね。平和的交渉をしてこの迷宮から撤退して頂きましょう」

竜を頭に乗せたままの少女は暫し歩くと、凍てついた大地を見渡す。

氷の中で固まった天人も多くいる。恐怖に引き攣った顔のまま木々と同じく硬直している様は見えていて気持ちの良いものではない。

拳で軽く小突くとす氷像は溶け、天人たちが転がり出た。

酸素を吸い込む機械と化したのか。天人たちは凄まじい音を立てて大きく息を吸っている。次には吸い過ぎた酸素を咽んで吐き出している。

紫色になった唇は痙攣していた。

「生きてますか？」

丁寧な口調とは裏腹に少女は天人の内の一人の頭を蹴り飛ばすと、天人の襟元を掴み、目線が合うところまで掴み上げた。見た目とは違い、力があるようだ。

鈍痛に表情が引き攣る天人は綺麗な顔立ちをしているが、今は憎悪の感情で染め上げられている。

少女の頭を手で驚掴みにすると、地に足を着け少女を見下ろした。

「貴様らは倭のものか！ 薄汚い真人の群れが我等天人に刃向かうと言うのか！？」

「言葉遣いがなってませんねえ。これだから教育の行き届いていない劣等民族は困ります。正しく現状を認識できていない」

ぎりぎり と締付けられる頭を物ともせず、少女は天人の両足を蹴り飛ばす。

悲鳴を上げて転がる天人の腹を踵で打ち付け、膝を曲げて見下ろした。

「いいですか？ 公正明大で、かつ美しい上に慈悲深い私があなたたちの取れる選択肢を提示してあげましょう」

腹の中に踵を捻り込む。力を込めて、決る様に。

そのたびに天人は苦痛に脂汗を流し、のた打ち回る。

「這い蹲って許しを乞うこと。自分たちの愚かさを認め、私の素晴らしさに頭を垂れ、武装解除して道を開けることです。素っ裸で迷宮から帰りなさい」

再び腹を蹴り飛ばすと、天人は木の幹に背中を強く打ち付けた。

地面を転がり、咽ぶ。

「てめええ！」

仲間が蹴り飛ばされるのを見た天人は美しい顔を歪めると、少女に殴りかかった。

しかし、幼竜になったそれに空から体当たりをされ、蹴鞠の如く地を跳ねる。

「平伏せよ。我が主は面を上げるとは言っていない」

「これこれ、ハーン。それはやり過ぎではないですか？ 考える時間を与えることこそが上位者の嗜みです」

「はは、さすがはエビィ。本当に慈悲深い。皆殺しでいいと思う僕にはわからない考えさ」

ぽかんと呆気にとられた幼竜は数瞬置いてくすりと笑うと踏みつけた天人から退き、少女の頭へと戻る。

ここが定位置なのだろうか。心なしか気持ち良さそうに瞼を閉じ、

少女の柔らかな銀系に顔を埋めた。

少女は頭上で和む幼竜に重みに頭を少し傾けると、周囲に散らばる状況を見回した。

竜の吐息で破壊された第五階層。

もとは緑溢れる和やかな場所だったのだが、今は天人たちが倒れるただの地獄だ。

身体の何処かが凍りつき、痛みに悶える者。少女に蹴り飛ばされ蹲るもの。幼竜に頭蓋を砕かれ失神した者。

惨憺たるものだった。無傷なままの天人もいるがその多くは女性である。

こちらに距離を取って警戒心を顕にしている者もいるし、恋人だろう男性を庇うように抱いている者もいた。

少女はまるで自分が悪役みたいな感覚に陥った。

そもそも喧嘩を売ってきたのは天人だと言うのに。

「何で私がこんな風に見られなきゃいけないんですか？ ゴブリンそっくりの鉤鼻野郎どもの分際で、何で私を批判的に見てくるのですか？ 此処は倭の領土！ あなたたちには侵入してきた犯罪者なんですよ？」

苛立ちは頂点に達し、同時に面倒臭さも湧いて出た。

「ハーン？ もういいですよ。こいつら全員失神させて迷宮の外に放り出しましょう」

少女の腕が黄色い光が迸る。

それは雷光だった。

一瞬でも氷像と化した天人たちは、水に濡れて通電し易くなっている。

しかも、地面は水浸しになっていて、逃げ場所は何処にもない。今にもトドメを刺さんと少女が緩やかに腕を下ろしたとき、頭に衝撃が走った。

身体が揺らぐが、危機を感じて無理やり横へと飛び退く。

元いた場所では幼竜が翼をはためかせ、小さな掌で見知らぬ青年

の拳を受け止めていた。

青年が少女に向かって放った拳を幼竜が庇ったといったところか。

「弱い者苛めは見ていて気持ち良いものではない」

耳心地良い低音で紡がれた言葉は青年が発したもののか。

「誰ですか？」

その青年は上から下まで真っ黒だった。

髪は黒、瞳も黒、身に纏う着流しも黒く、帯すらも黒かった。

腰には太刀と脇差を提げている。鞘も黒塗りされており、おそろく鉄で拵えられたものだろう。

見るからに倭皇国人である。

幼竜の脇をするりと抜けると天人と少女を遮る場所に立ち、少女の事を睨み付けている。

「いくらなんでも遣りすぎだろう。何も此処までやる事はない筈だ」
ざりりと歯を噛み締め今にも飛び掛かろうとする幼竜。

それを横手で抑えつつ、少女は眦を吊り上げて青年と対面した。
「これは敵ですよ？ 倭皇陛下の所有物に手を出した下賤の民です。
弁明の余地すら無い大罪です。殺さないだけ有難く思っただけです」
すね

「エビイ、退いてよ。偽善者の相手は僕がするよ」

「あー、いや、仲間同士で戦うのはよろしくないと思いますけど…」

…

「邪魔するのは敵だろう！？」

気焰を吐き出す幼竜を見て少女は深く溜め息を零す。

「殺しちゃ駄目ですよ」

「わかってる！」

幼竜は凄まじい速度で飛び出すと、青年へ一撃を見舞うために拳を振り被った。

青年は幼竜の動きに合わせるように拳を引いた。

瞬間、拳の距離まで近づいていた幼竜の顎が一方的に跳ね飛んだ。

「あ、れ……？」

青年の拳は引いた場所のまま固定されている。仮に神速の突きで迎え撃ったのだとしても、幼竜の優れた動体視力からすれば見逃すはずもない。

拳は確実に動いてすらいなかった。

幼竜は衝撃に流されるまま放物線を描いて飛んでいき、空高くで静止した幼竜は困惑に首を傾げる。

すると青年が大地を強く踏みしめ、腹の底から声を出した。

「誇り高き竜が不意打ちに加担するのか！」

「誇りじゃ御飯は食べれないし、そんなものよりもエビィの言葉の方が優先順位が高いのさ」

「誇りを捨てたらただの獣！ 魔獣の王が聞いて呆れる」

舌鋒が火を噴く。

空から見下ろせば天人たちはとくにいなくなっており、この場には少女と青年、幼竜だけが残っている。

攻撃を受けて頭も冷え、幼竜はやる気を失っていた。

少女もだらりと腕を伸ばし、物憂げな瞳を向けている。

「ま、意味がないよね」

幼竜は主君の頭上へと戻るとすすんと鼻を動かし、甘えるように銀髪を弄んだ。

少女は再び嘆息すると、鼻息荒く戦闘の意志を継続させている青年へと近づく。

「侵入者は逃げてしまいましたし、倭人同士、戦う意味もありません。お互い矛を納めませんか？」

「逃げるのか？」

「ん、逃げるとかじゃなく、無駄な事をやりたくないだけです。それに私は戦闘は専門じゃありませんし、好んで戦う事はしたくありません」

「そうか」

青年は納得してはいないのだろうが、倭人という言葉に反応して構えを解く。が、その瞬間を狙って少女は滑るように青年に迫ると、

懐深くから拳を撃ち上げた。

体重を後ろに預け、青年は辛うじて奇襲を避ける。
当たれば顎は砕けていただろう。

青年は後ろに跳び、非難の眼差しを少女に向ける。

少女はふふんと笑っていた。

「かといって、友人が一方的に殴られてそのまま放置するほどお人好しでもありません。同じように顎を殴らないと釣り合わないじゃないですか？」

「不意打ちとは卑怯な……」

「あなたも私に不意打ちしてますよね。ハーンが受け止めてくれましたけど」

「あれは、本意ではない」

青年は罰が悪そうに俯く。

その表情を見た少女は意地悪く唇を吊り上げると、青年の刀に目を遣った。

倭人で刀。

実に分り易い組み合わせである。

「武士の風上にも置けませんね。正面から打ち合う事を旨にする侍がか弱い小娘相手に不意打ちですか？ ああ、こんなことだから倭国男児は軟弱者と揶揄されるのです。あなかなし。あなかなし！そこに誇りはあるのでしょうか！？」

青年の拳は力の込めすぎか、震えていた。

俯いた顔は散切り頭の前髪のせいで垣間見ることはできないが、おそろく羞恥に塗れている事だろう。

武士は喰わねど高楊枝。

倭人とは何よりも体面を優先する種族である。その中でも取り分け誇りを重視する侍。

彼らは等しく何かに縛られている。

青年は顔を上げた。

目尻から一滴の水が流れ落ちたように見えたのは気のせいか、や

や目が充血している。

そして青年は両膝を着き、正座する。

刀を二本とも脇に置くと、頭を額にこすり付けた。

土下座である。

「その件に関してはすまなかった！ 詫びさせてもらう！ 殴りたければ殴れよ！」

予想外の行動に少女は目を瞬かせた。幼竜も同じくぼかんと口を開けている。

「虐めすぎましたかね？」

「遣り過ぎだよ。侍に土下座させるなんてあんまりだよ。しかも泣いてたよ、彼」

「あー、あー、私が悪いんですか？ 私が悪いんですか？」

「わからないけど、侍の誇りを汚すのはあまり良くないと思うね」

少女は逡巡すると、冷えた地面に額を押し付ける青年の頭にぽんと手を置いた。

「熱くなり過ぎです。少し頭を冷やして下さい。何も土下座をする事はないでしょう？ ほら、私たちの仲じゃないですか」

「初対面だ！」

頭に置かれたか細い手を振り払い、少年は屈辱に侵された顔を少女に向ける。

完全に頭に血が昇っている。額に青筋が浮かんでいた。

「う、あうう……そうだ！ えっと、私はエビルデインと言います。倭皇国迷宮探索学校に所属してます。あなたは？」

「所属はお前と一緒にだ。字は不破、名は恭一。流派は不破無刀流中伝……」

「不破？ 不破ってあの不破家ですか？ 確か一刀流ですよ」

青年はふっと生気の抜けた顔になり、太刀を手に取る。

「生憎と”こいつ”は相手を選ぶ。敵として認めないと抜けないんだ……」

複雑な表情を浮かべ力無く呟いた。

そうなんですか、と少女　エビルデインは恭一の腕を手に取り
と無理矢理に立たせた。

「流石にそこまで潔くされたら殴れません。今回は貸一ということ
でどうでしょうか？　あ、もしくは教えてほしいことがあります」

「何だ……」

「さっきの不可思議な術は何ですか？　予備動作だけでの魔導練成
？　いえ、魔力の波動は感じませんね。そもそも貴方からは魔力も
天力も感じません。鬼気など以ての外。おそらくは何かの異能です
よね？」

「　　そんなの教える馬鹿はおらんだろう」

それもそうですね、とエビルデインは一步退き、青年に背を向け
て歩き出した。

恭一はエビルデインに手を伸ばし掛けたが、ぐっと拳を握って腰
元で抑えた。

その様を幼竜はエビルデインの頭上でちらりと見て、とんとんと
頭を叩く。

「アカシックレコードの連中を逃がされたんだよ？　あのまま終わ
らせても良かったの？」

「終わらせてもいいと判断したからあなたも手を引いたんでしょう
？」

「そうだけ……」

「私の仕事は別にゴミ掃除ではないんですよ。だからあの人たちが
逃げようともあまり関心がありません。まあ本当はあまり良く無い
事なんですよけどね……」

砕けた道路を見るにつけ哀愁の籠った視線を向け、深く項垂れた。
「これ、直さなきゃいけないんだと思うと憂鬱ですね。何で防備と
補修のどちらもやらなきゃいけないんでしょうか。侵入者の掃討は
探索部がやって然るべきです」

「エビィは博士の眷属だからね。仕方ないよ。期待されてるってこ
とじゃないのかな？」

ジャケットのポケットから水晶玉を取り出すと、地面に投げつけた。

地面に方陣が描かれ、煌めく光が漏れ出す。
光から目を離して細めると、その間に方陣の上には多くの岩石が現れていた。

「枠組みは壊れていないですね？」

「うん」

「じゃあ直しますか」

幼竜は岩石を掴み上げ、移動し始める。

彼らの仕事は迷宮補修部。

所有する迷宮を舗装するのが仕事だった。

式・無茶振り魔王

そこを表現するならば、まさに”不吉”という言葉しかないだろう。

堅牢な石造りの回廊は薄暗く、松明も今は燈されていない。差し込む光はなく、耳障りな雷鳴が轟いたときのみ照らされる。

窓枠から稲光が差し込んで見えるのは絶対神カイジネルが十字架に磔にされて、胸元には魔槍ザフィエルが突き刺さっている絵画が描かれた大きな扉。

その先にある部屋はとても大きなものだった。

成金趣味の高価な調度品ばかりで彩られているわけではなく、品の良い。しかし高級であると一目でわかるものがずらりと並ぶ。

壁には先祖代々の絵画が並べられており、その先には王が座すための玉座があった。

妖艶な色気を放つ女性は露出度の高い漆黒のドレスを着ていた。

美しい曲線を描く足を組み、背凭れに体重を掛けて微笑んでいる。

彼女の名は鈴木恵子。

しかし、人は彼女の名前を呼ばない。口を揃えて魔王と呼ぶ。

「ねえ、エビルデイン？ 私は薄汚い天人族は皆殺しにしろ、と常日頃言ってるわよね？」

目線の先にいるエビルデインは額を地面に押し付け黙している。

幼竜ハーンも同じく、怯えて地面に座り込んでいる。

とん、と腕掛けに置いている手を離し、エビルデインの事を指さした。

すると土下座をしていたエビルデインが機械的な動きで面を上げ、恐怖に満ちた表情が露わになる。

「いや、でもですね。あまり殺し過ぎるとアカシックレコードの連中が文句言ってきますし、それに私は戦闘が専門ではないですし……それにほらっ！ ちゃんと撃退はしましたよ！ 倭皇陛下もきつ

とお喜びになられているはずです！」

だらだらと冷や汗が流れる様はまさに言い訳をしている童女のよう。

心なしか何時もより早い口調で捲くし立てている。

そして、はっと思いついたかのようにハーンの方を見た。

「ほ、ほら、これです。前欲しがってたじゃないですか、天人の翼。三対くらい転がってたんで拾ってきました。ほれ、ハーン！」

ハーンはこくりと頷くと小さな翼をはためかせて部屋から飛び出て行き、三度雷鳴が鳴った後に帰ってきた。

手には小さな包みだ。

床に包みを放り投げると、中からごろりと何かが現れる。

それは黒ずんだ翼だった。

鼻を衝く刺激臭は耐え難く、恵子がひくりと頬を引き攣らせる。

私不愉快です、と表情で物語っている恵子を見るにつけ、エビルデインの冷や汗の量は加速度的に増して行く。

「ハーン！ちゃんと冷凍保存するように言っておいたじゃないですか！ただでさえ腐りやすいのに……！」

「言ってなかった！そんな事エビィは言ってなかったよ！」

「もうっ！これだから！すいません。ハーンにはちゃんと言って聞かせるんで……」

宙に浮かんでハーンは抗議するが、エビルデインに口元を掴まれて地面に叩き付けられた。

喋ることはできず、むぐうと声にならない声を捻り出している。

しかし、主君は決して離すことはなく、幼竜はただ地に伏せるしかなかった。

その折、恵子は優雅に立ち上がると、かつんと硬質な音を立てて窓へと歩いていく。

ずっと空を見上げると途端に雷雲が消え失せ、青々とした大空が世界に広がった。

空高く聳え立つ魔王の塔から見下ろす世界は絶景で、日々の生活

に勤しむ千窟宮が一望できる。

「今日も綺麗な青空ね。雲一つない。そう、私の送ってきた人生のように完璧に澄み渡っているわ」

膨大な力を用いて強制的に天候を書き換えた暴君は静かに呟いた。

「僕は席を外すね。頑張つてね、エビィ」

「あ、逃げないで！ 見捨てないでください！」

エビルデインの押さえ付けから抜け出し、ハーンは危機的状況から逃げ出そうとした。だが、上から何かに押さえつけられたかのようになり再び地面に叩き付けられてしまった。

恐る恐る二人が振り返った先には笑みを張り付かせたまま八重歯を覗かせる恵子がいた。

漆黒の瞳には魔力光が爛々と輝き、ハーンの動きを束縛していることがわかる。

「ハーン？ 戻りなさい」

「は、はひっ！」

命令され、ハーンはエビルデインの頭上に飛び乗った。

見えていて可哀想になるくらいに怯え切っており、エビルデインの膝元にしがみつき、顔を埋もれさせている。

哀れに思ったのか、エビルデインをよしよしとハーンの頭を撫でていた。

その間にも恵子は窓から空を見上げ、朗々と語っている。

「ああでも、そう 今日で私の人生には濁りが出来てしまったわ。私の研究の集大成と思っていた作品がよもや泥を付けられてしまうなんて。完璧な道を歩んできた筈が、何処で踏み外してしまったのだろう。奈落の底へと突き落とされた気分よ。ああ、最悪だわ」

エビルデインは最悪な気分だけ共感できた。今まさに飼いや獣は虐められ、自分も責められ、惨憺たる状況である。

「スライムという種に対して可能性を見出した。鋼の硬さを持つもの。逆にゼリー状に柔らかくなるもの。変幻自在に形を変えるもの。毒を持つもの。はたまた溶岩のような熱さを持ち、永久凍土の冷た

さを持つもの……彼らはまさに神秘だった。だから私はそれらをもとに練成し、全てのスライムの能力を持つお前という存在を作り上げたというのに！ 何故負けたんだ！」

しかも何でこんな汚物を私の部屋に撒き散らすんだ！ と恵子は痛烈に言葉を放つ。

汚物云々だけは言い返す事が出来ず、エビルデインは口籠る。

しかし無言の圧迫が満たされていく室内で沈黙を守ることは難しく、すんすんと涙を零すハーンの気弱さに目を当てられ、エビルデインは渋々口を開いた。

「いやあの、そのですね。皆殺しにするつもりだったんですよ。だけど邪魔が入ったんです。私のせいじゃないんです。本当ですよ？ 決して見逃したというわけでは……」

「邪魔？ 油断してやられたの？」

「油断というか、何というか、そのですね。相手の能力が全くわからなくて。あ、でも負けたわけじゃないんですよ？ ハーンが挑んで殴られてましたけど、別に私は」

「エビイ！ 僕の事売ろうとしてないっ！？」

「勘違いです。私が親友を売る筈無いじゃないですか」

エビルデインとハーンの遣り取りを見るにつけ、恵子は深々と嘆息する。

窓際から離れて再び玉座へと座ると、大きな黒瞳を細めて二人を威圧した。

攻撃的な気に触れて二人は身体を震わせて萎縮すると即座に居住まいを正す。

つまり、正座した。

恵子は肩を丸める二人を満足げに見下ろすとハーンに視線を向かわせる。

視線を感じたハーンの小さな体は一際大きく震わせた。

「愛娘は日々言い訳ばかりが上達して困るわ。ハーン、あなたは正直者よね？」

「え、う、え……？」

「主に背くのは辛いこと。あなたの忠誠心を私は知っている。けれど、本当の忠臣と言うのは時に主の過ちを正すこともあるわ。それは必要なことなの。わかるわね？」

ハーン……、と媚びた声を出して助けを求めてくる主の声。

怒らないから言ってみて？ 悪いようにはしないわ、とやんわり問いかけてくる主よりも上位の存在に出された問い。

ハーンは一頻り頭を悩ませてから答えた。

「実は侍に邪魔されて。えっと、不破恭一って名乗ってました」

「へえ？ 天人に負けたわけではないの？」

はい、とハーンは頷き、エビルデインは身体を頹れさせる。

「ん、不破？ 不破……不破！？ あの護皇三家の不破？ なるほど、負けたのね？」

「ですから負けてませんって！」

立ち上がり、エビルデインは猛烈に抗議した。

しかし、それがまともに取り合ってもらえるはずもなく、恵子はぶつぶつと思考に没頭している。

「実験したいわね。問題不出の不破一刀流も見たいし、是非サンプルが欲しい。即刻捕縛して来てちょうだい」

「無茶言わないで下さい。本当にあの不破家ならそれこそ大問題ですよ！」

「不燃廃棄物か……。本当に役に立たないわね。たまには私のために身を粉にして働いたらどう？」

「別の対象に興味が移った途端にあからさまに冷たい扱いをするのやめて下さい！ 慣れてますけど！ これでもけっこう凹むんですよ！？」

「あなたの気持ちなんて聞いていないわ。凶々しい」

恵子は虫を追いやるかのように手を払う。

エビルデインの表情が翳ったことなど関係なしだ。

「可及的速やかにね？ 私は気が長い方ではないの、知っているで

しょ？」

「が、頑張ります」

「結果で応えてね？」

「はい……」

失礼しました、と二人は重々しく扉を開けると外へ出る。

部屋の中と同じく石造りであり、回廊が繋がっている。

壁には魔物を討伐する絵画が飾られていて、古代神の一説が書かれていた。

既に見慣れた光景で、いつもここを通る時はそこまで緊張はしないのだが、失敗した日ばかりは気が重い。

さらに無理難題を押し付けられたとあつては自然と足取りも重くなる。

「で、どうするのさ？」

頭の上に乗ったハーンが問う。

答えることはなくエビルデインは長く続く回廊を黙々と歩く。

窓から見える人工的な青空が妙に鬱陶しかった。

雲すら浮かんでおらず、ぎらぎらと太陽が輝いている。

「まあ博士絡みは碌な事が無いからね。本当に予想の斜め上に行くよ。実験したいってね……」

回廊が終わり、螺旋階段となる。

エビルデインは階段の前で立ち止まると、恵子の座す部屋を振り返った。

「とりあえず彼について調べなければなりませんね。不破恭一

護皇三家ならば迂闊に手を出せません。というより、そもそもこんな民間学校に在籍している事自体が有り得ません。彼らは何処かに籠って常に武を磨いていると聞きますし」

「事実としていたんだから仕方ないよ。まずは生徒の在籍名簿を調べよう。それでわかる筈だよ」

階段を降り始めたとき、背後から差す陽光のせいで表情はわからない。

「そう簡単に教えてもらえますかね……」
が、毀れた言葉はやけに沈んでいて、陽気な太陽とはまるで正反対だった。

普通都市というのは国が主導して造られるものだが、此処は元々どの国も興味を示すことのない不毛の大地だった。

せいぜいが観光の時に訪れる程度の田舎町。

しかし、突如現れた多くの迷宮のせいであらゆる国が手を出し始め、今や多種多様の種族が入り混じる群雄割拠の土地となってしまった。

誰が呼び始めたのか、此処は千窟宮と呼ばれている。

千の洞窟を持つ神の宮、というのが由来らしいが、過去の話なのでそれが正しいかどうかはわからない。

とにかく言えることは、ここは迷宮探索をするために出来上がった一大都市であり、色々な国が手を出している領域だと言う事だ。

国 と言えども多くあるが、その中でも有力な部類に入るのは倭だろうか。

現人神が統治する神の国 倭皇国。

千窟宮に”武芸探索所／ぶげいたんさくどころ”を設置し、後続を育てる為に倭皇国迷宮探索学校なるものも設置した。

迷宮都市の東部の殆どを確保し、新人たちの育成も万端である。校舎の造りも倭特有の木造建築であり、屋根は瓦で覆われている。木目張りの床は土足厳禁で、多くの人は足袋を履いて歩いていた。エビルデインも例に漏れず足袋を吐き、愛用している鞣革のジャ

ケットに白色のカットソー、膝ほどまでしかない袴に帯を巻き、校舎の受付の程近くで腕を組んで天井のシミを数えていた。

人事部のカウンターに小さな身体を乗せているハーンをちらちらと横目で様子を窺っている。

カウンターの先には小さな小窓があり、そこから受付の若い女が顔を覗かせていた。

笑顔でハーンの言葉に逐一頷き、妙に甘ったるい声で反応している。

「不破恭一君……？　ちょっと待ってね　あ、いるわ。四年の迷宮探索部真人課に所属しているわね。顔写真はこれだけ、合ってる？」

赤く塗られた爪に挟まれて見せられたのは学生名簿の内の一枚だ。いくら学生と言えども個人情報をもそう簡単に見せていいものではないのだが、何故か受付の女はハーンの言いなりだった。

「うん、合ってる。これだよ」

「そ、良かった。また何時でも来てね。ハーンちゃん」

「うん、ありがとう。メリッサは何時だって僕の為に動いてくれるから好きだよ？」

「やだ、もう……またそんな調子の良い事言って！」

小さな女の子のように身体を丸め、女は心底喜んでいた。

「これを僕だと思って受け取って」

ハーンは自分の身体から鱗を剥がす。

「竜鱗」

「構わないさ！」

「好きイ！」

女は喜色満面に鱗を手に取り、ハーンに抱きついた。

何度も頬にキスをされてようやく解放されたとき、ハーンは口紅の跡が残るままエビルデインの方へと飛んでいく。

背後では女が童女のように勢いよく手を振っており、ハーンもそれに応えて尻尾を振っていた。

見送りが終わってハーンが定位置の頭上に止まろうとすると、エビルデインに手で振り払われる。

眉間に皺を寄せ、見るからに不機嫌そうだ。

「メリッサって娘は竜鱗目当てだと思いますよ？ 本気なら止めたほうがいいかと」

ハーンは暫し顎に手を遣り、考え込んだ。

まさかとは思うが、首を傾げつつも冗談交じりに言ってみる。

「嫉妬？」

エビルデインがぐぐもった声で破顔し、醒めた目でハーンのことを見つめてくる。

背筋を流れる汗は間違いなく冷え切っていて、ハーンは今すぐ逃げ出したい衝動に駆られる。

だが、凍てついた双眸に囚われて身動き取れず、首元をがっしと鷲掴みにされても尚金縛りは解けなかった。

「ふふーふ！ 面白いことを言いますね。下僕の分際で随分と嘗めた口を……」

「冗談！ 冗談だよ！ 彼女が竜鱗目当てなのはわかってる。けど、僕からしたらまた生えてくるものだからね。どうでもいいことだよ！」

途端に場を満たす怒気が解けた。

首を押さえつけていた物理的な握力からも解き放たれ、エビルデインの頭上へと運ばれる。

ハーンはほつと胸を撫で下ろした。

「竜鱗、私にも頂戴」

「良いけど、使うの？」

「ん、防具くらいなら作ってもいいかもしれませんね。ジャケットやら欲しいと思っていましたし」

「なら生え変わりの時期に一気に渡すよ。防具を作るとなると量的に嵩むだろうしね」

「それもそうですね。」

では参りますか」

「何処に？」

狙い澄ましたかの如き正確無比な指先がハーンの額を撃ち抜く。
デコピンだ。

竜鱗を貫通する衝撃を与えられ、ハーンは苦痛で蹲る。

「不破さんのクラスですよ。確か迷宮探索部真人所でしょう？」

「あ、そうだったね。行こう行こう」

涙声で返答し、そのまま二人は校舎の中を歩き出した。

倭皇国迷宮探索学校には多くの学部が存在するが、簡単に分けるなら二つある。

戦闘員か、非戦闘員かだ。

戦闘員は迷宮に生息する魔物たちの生態を学び、倭国独特の武術を身体に刻み込まれる。

武術とはまずは体術だ。身体の運用法を学ぶためには武器在りきものではなく、身体一つで戦う術をまずは教えられる。

その後に武器を選ばせられる。

刀か、槍か、弓か、主にこの三つの内のどれかだが、稀にどれにも属さないものを学ぶものもある。本当に極僅かだが。

非戦闘員は医療や鍛冶、新しい素材の研究などに従事するものたちだ。主に運動神経の乏しいものたちの為にある進路である。

広大な校舎はこの二つの戦闘を本懐とするものは穴熊と呼ばれる西棟を使い、非戦闘の研究職たちは炬燵と呼ばれる東棟を使っている。

エビルデインとハーンの二人は西棟の穴熊をぼんやりと歩いていた。

倭皇国の校舎だからだろうか。真人と呼ばれる何ら特徴のない人間ばかりが廊下を行き交っている。

制服は羽織に袴といったオーソドックスなものだ。

倭国建築の木目の床に扉は障子で、不思議な趣がある。

生徒たちは指定された制服を着ているもの、改造しているもの、

または完全に私服を着ているものなど実に様々だ。

しかし、倭皇国特有の漆黒の髪と瞳は共通であり、茶に染めてい
るものもいるが、大まかには黒か茶だけだ。そんな中、エビルデ
ィンの銀色の髪と蒼色の瞳は酷く目立つ。

「あんな可愛い子うちにいたっけ？」

「銀髪だ。綺麗だなあ。外国人か？ でも、翼とか生えてないよな
あ？ 染めてんのか？」

「それよりもあの子、竜連れてるぞ。魔獣使いか？」

まずはエビルディンの容姿についてざわめいていた学生たちだが、
ハーンを見た途端に興奮し始める。

竜というのは極めて希少種だ。

本来なら竜というのはその強大な力と高い知能故に人とは敵対関
係にあることが多い。というより殆どだ。

倭皇国では竜神と呼ばれる人と共存する竜がいるが、民間人が会
える事などまずもってない。

そんな中、校舎で普通に竜が闊歩しているのである。しかも女の
子の頭の上に乗って。

自然と奇異の視線は集まるといふものだが、ある一人の言葉によ
って場が一気にどよめいた。

「あ、あいつってハーンじゃ？ 仲良くなれば竜鱗くれるラッキー
キャラ！」

竜鱗とは世界一硬くて柔軟な素材である。

学生レベルでは決して手に入らない最高級の素材である。

それを身体中にびっしり生やし、なおかつ仲良くなるだけでくれ
るのである。

普通に考えれば奇跡だろう。

「え、まじで！？ 絶対仲良くなんなきゃ！」

「お友達になつて下さい！」

次の瞬間、歩くのも困難なほどな人だかりに囲まれてしまった。
群衆の瞳には竜鱗が浮かんでいる。

「ハーン、あなたは実に有名なんですね」

「そんな非難するような目を向けないでよ！ 校内では自由行動って言うてたじゃないか。だから、ちよつとね。僕だっているいるあのさ」

ハーンは抗議しつつエビルデインの銀髪に捕まっている。地獄から這い出る手にあらゆる所を掴まれ、今にも引つ張られそうなのを防ぐためだ。

しかし、主は竜を裏切った。

あらゆるスライムの特性を持っているエビルデインはいろいろな能力を持っている。

その中の一つである電気を髪を伝ってハーンの身体に流したのだ。ハーンの身体が一際大きく震え、何かが焼け焦げた鼻に衝く匂いが漏れ出す。

「自由行動ですよ。どうぞ御勝手に」

亡者の手に渡ったハーンを置き去りにし、エビルデインは人ごみの間を縫うように歩き、そそくさとその場を立ち去った。

「見捨てないでえ！！」

背後から聞こえる悲鳴は無視し、進路はそのままに突き当りの部屋まで辿り着く。

障子の前に立て看板がしてあり、達筆で『真人所』と書かれている。

活気がある場所なのだろう。中からは騒々しいくらいに元気のある声が満ちていて、エビルデインは苦笑を零して障子をそつと開けた。

小さく開いた障子から一歩踏み入り、お辞儀をする。

「失礼します。不破恭一さんはいらっしゃいますか？」

畳張りの部屋だった。

等間隔に座布団が敷かれ、前には机が置かれている。

今は休憩時間なのだろう。さきほどまで騒いでいたのだが、エビルデインが入室した途端にしんと静まり、突然の乱入者に不躰な視

線を送ってくる。

中にいるのは凡そ三十人といったところだろうか。
全員もれなく鍛え抜いた身体をしており、脂肪で弛んだものはいない。

男女同数とは言えず、男が二十で女が十ほど。やはり女の戦闘員は少ないのだろう。

「不破？ あいつなら道場にいるんじゃないかな。てか、君誰？ すっげえ可愛いね。探索部の子？」

制服の羽織に色々な館バッジをつけた青年が一步前に出てきてエビルデインを出迎えた。

頭二つほどエビルデインより背は高く、それでいて軟派な雰囲気纏う青年だ。エビルデインの肩にさりげなく手を置いている。即座に一步退いて手を退けさせたが。

「あー、私は補修部でして。探索部とは関わりはあまりないですね」「ふうん。そんな子が不破にどういった用で？」

「秘密です」

愛想笑いを浮かべて誤魔化した。

「気になるなあ。まあ不破にも友達がいたんだな。良かったよ。あいつ全然誰とも話そうとしないからさ」

「話そうとしない？」

「ん、御堅い奴なんだよ。家の事もあるし、俺等じゃ軽々しく話しかけられなくてさ。でもこんな可愛い子と不破がなあ」

「何か勘違いしてませんか？」

「つまりはそういう関係なんだろう？」

激しく思い違いをされている気がしたが、訂正するのも面倒なので頭を振るだけで済ませた。

頭の奥にする鈍痛もおそらくは勘違いなのだろう。

眉間に指をやってエビルデインは俯くと、小さく溜め息を零した。

「とりあえず不破さんは道場にいるんですね？」

「ああ、その筈だ」

エビルデインは後ろ足で障子から出ると、再びお辞儀をした。

「ありがとうございます」

そうして障子を閉め、来た道を振り返った。

どうやらハーンはまだ弄られているようで、いろいろな学生の手
に身体を弄ばれているようだ。

回収する気も失せ、エビルデインは道場のある方角を見た。

穴熊の廊下をしばらく歩き、校舎から渡り廊下を経て繋がってい
る。

そこは身体を鍛える場所だった。

ここだけ空間が切り離されているのかと感じるほどに道場は澄み
切った空気で満たされていた。

窓は殆ど閉められ、隙間から差す僅かな光源では暗が多い。

陰の中、圧倒的な存在感を放つ青年がいた。

大振りの木刀を肩に提げ、大上段に構えて振り下ろす。

その動作にかかる時間、およそ五分。

緩やかと言うのも愚かしいゆつくりとした速度で、腕の筋力を酷
使して重りのような木刀を振るのは凄まじい苦行だろう。

二の腕が破裂せんばかりに膨らみ、体幹は体勢を維持する為に硬
直している。足は微かに震え、顔からは濁流のように汗が落ちてい
た。

それを何度も繰り返しているのか、軋みを上げる軸足は木目の床
を陥没させている。そこからして凄まじい踏み込みを想像させた。
流れ落ちる水滴で床には水たまりが出来ている。

よく見れば口元には猿轡のようなものを噛み締め、歯が砕けないように処置をしていた。

どれほどの時間を掛けてこの作業をしているのか。そんな時、道場の観音開きの扉が無遠慮に開かれる。入ってきたのは銀髪の少女であるエビルデインだ。

陽光を背に煌めく髪は白銀の輝きを放ち、鮮烈な光を纏っている。やはりエビルデインは躊躇することなく、恭一が汗まみれになっている理由もわかりつつも道場に足を踏み入れた。

「こんにちは。お邪魔でしたか？」

光に目を細め、青年　不破恭一は稽古を中断した。

「いや……あんたか。何の用だ」

「実はお願いしたいこともありまして」

「貸の話か？　構わない」

木刀の切っ先を地面に置き、やや体重を掛けて恭一は答える。

するとエビルデインは満面の笑みを浮かべ、なら話は早い、と自分の掌に拳をぽんと置いた。

「実験動物になってももらえませんか？」

「断るっ！」

恭一は全力で拒絶した。

それこそ木刀を青眼で構えるくらいに警戒心を剥き出しにして。

「そんな全力で断らなくても……悪いようにはしませんから」

「悪い響きしか感じられんぞ！」

怯えの混じらせて後ろ足に体重を掛けて構える恭一は武士らしくなく何時でも逃げ出しそうだ。

エビルデインは嘆息すると、嗤う。それも挑発的に。

「仕方ないですね。では一戦お願いできませんか？」

「何故？」

「色々と理由はありますが、ほら、力尽くなら言っ事聞く気になりますよね？」

「わかった」

「行きますよ」

「来い」

ここで目線を合わせ、足元が爆ぜた。

相手の攻撃を待つて反撃するのではなく、お互いに切り込む。

エビルデインは素手のまま、恭一は木刀を振り被って。

避けるために身体を屈ませ、左右どちらにでも踏み込めるように姿勢を取ったのだが、突然足を掬われた。

両足ともに不可視の衝撃に跳ね上げられ、宙に投げ出される。

飛来する木の剣。

空気を切り裂く速度で肉薄する木刀を持ち前の反射神経と怪力だけで殴り飛ばした。

「弾かれ……!？」

木刀は恭一の手を離れ、道場の床に乾いた音を立てて落ちる。

間を置かず、腰に差した太刀へと視線を向け、手を翳す。だが、首を振って何かを断念した。

それを隙と判断し、エビルデインは宙に浮いたまま身体を捻る勢いを使い、顔面を狙って回転蹴りを放つ。

その蹴りも不可視の衝撃を受けて軌道を逸らされ、床に叩き付けられたが。

硬い床を破砕する蹴りを見て驚愕したのか。恭一は一足飛びで距離を取り、噴出した汗を拭っている。

「チイツ！ 拳で木刀を弾くか！？ どれほど硬い拳骨なんだ

……」

「術？ ただの生態的な能力ですよ」

ふん、とエビルデインは鼻息を鳴らす。

メタルスライムの鋼の硬さを用いただけだが、これは本当に生態的な能力だ。

同時にエビルデインも不思議に思っていることがあった。

先ほどから二度受けた攻撃。

足を浮かされ、攻撃をずらされる。

奇怪だ。

「やはりわかりません。どういった能力なんですか？」

「さてな……」

「力点移動？ 空間歪曲？ 違いますよね……じゃあただの遠当てですか？ それとも侍が得意とする気功運用術の極みですか？」

ふふん、と恭一は顔を歪ませた。

そんなものがあれば良かったんだがな、と皮肉気に。

「全部違うな。それに、気功なんてものはまやかした。そんなものは存在しない」

武術の中には身体を動かす概念を気として表すことはあるが、それを飛び道具として用いる技術は確立されていない。

気とは体内でしか作用しないものだからだ。

使いこなせるのは達人と呼ばれる業を究めたものたちだけだが。

エビルデインは達人ではなく、そもそも武術を会得すらしていない。身体能力と見様見真似だけで戦っている生粋の素人だ。

頭を悩ませて答えは出ない。

「わかりませんね……」

「わからないように使っている」

「それもそうですな。ならば」

エビルデインは右手を突き出した。

掌から薄ら蒼いゼリー状のものが生えてきて、だんだんと形を成していく。

捻じれた切っ先に細身の棒。

それは槍と呼ばれる代物だった。

「召喚術か！？」

「ただの生態的な能力ですよ」

掌から伸びた槍を頭上で回し、暴風を巻き起こす。

稲光が白熱し、道場の中は雷雲の如き様相を呈している。

恭一は指で地面に杭を打ち、どっしりと構えている。それでも動揺は隠しきれていなかった。

そして。

「エビル！　まずいつて！」

エビルデインの横っ腹に幼竜が突撃し、もんどりうつて転がり、道場の壁へ叩き付けられた。

恭一はあんぐりと口を開け、先ほどまで雷雲で覆われていた道場を見まわしている。

いつもの澄み切った清涼な空気の道場である。

「何ですか？」

むくりとエビルデインは起き上がり、腹にぶつかってきた下僕を持ち上げた。

ぱくぱくと口を開閉するばかりで、焦り過ぎてまともに喋れていない。

さて何なのか、と思考するが、間もなく理由が判明する。

かつん、とヒールが床を叩く硬質な音が響いた。

音の方へと見てみれば、そこにいるのは倭風の羽織や袴を着ているものではなく、天族が好むぴったりとしたブラウスとスカートと呼ばれる代物を着込んだ切れ長の瞳が印象的な女性がいた。

生徒指導部部長の教師である。

私怒ってます、と震える肩が明確に示している。さらに赤縁の眼鏡をしきりと中指で持ち上げていることも機嫌の悪さの証である。

眼鏡くいくいと止め面を上げると、彼女はすうと息を吸い込み、控えめな胸を膨らませた。

「エビルデインさん、不破さん、あなたたちは道場で何をやっているのですか！　決闘行為は校則で禁止されていますよ！？」

怒号である。

校則で教師の許しなき私闘は禁止されている。

破ったものは例外なく処罰の対象である。

はあ、とエビルデインは深く嘆息すると、ハーンを頭に乗せて硬直したままの恭一の方へ近づいて行った。

「やっぱり抜かないんですね？」

視線は太刀を差していて。

「二人とも！！ 生徒指導室へいらっしやい！」

教師の逆鱗を受け、エビルデインは愛想笑いを浮かべて小走りで向かう。

恭一もエビルデインに続き、重い足取りで歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8343z/>

主人公はスライムクweenッ！

2011年12月27日20時47分発行